

近畿地方における凸帯文期の穀物農耕の拡散

—大阪府長原遺跡・奈良県中西遺跡・秋津遺跡の圧痕分析を踏まえて—

中山 誠二・大庭 重信・岡田 憲一

はじめに

筆者らは、近年、大阪平野および奈良盆地の縄文時代末から弥生時代にかけての土器圧痕分析を行っている。本発表では、大阪府長原遺跡および奈良県中西遺跡・秋津遺跡の凸帯文期前後の分析結果を踏まえ、本地域の穀物農耕の拡散・開始について考えてみたい。

1 近畿地方における凸帯文期の穀物圧痕の検出状況

近畿地方における農耕開始期の穀物圧痕のこれまでの検出例は、口酒井遺跡の凸帯文2期前半（口酒井期）のイネが最も古く（浅岡 1988、森岡 1991）、大阪府宮ノ下遺跡では凸帯文2期後半の土器にキビが確認されている（濱田・中沢 2014）。

また、遠藤英子氏が行った滋賀県上出A遺跡の圧痕分析では長原式に並行する凸帯文3期の土器からアワ・キビ・イネ・シソ属の種実が確認され（遠藤 2013）、京都府北白川追分町遺跡ではイネ・アワ・キビ、大阪府長原遺跡ではイネ・キビ・シソ属、兵庫県口酒井遺跡ではアワ・キビなどの検出例が報告されている（遠藤 2012）。

さらに近年、日本全国の縄文時代から弥生時代への移行期の圧痕土器の悉皆的調査が進み、近畿地方においても大阪府馬場川遺跡、船橋遺跡、讃良郡条里遺跡、水走・鬼虎川遺跡、兵庫県篠原中町遺跡、丁・柳ヶ瀬遺跡、和歌山県徳蔵地区遺跡、立野遺跡などの調査結果が報告されている（設楽編 2019、設楽他 2019）。この内、大阪府内の船橋遺跡では縄文晩期後半の土器からイネ粃、凸帯文3期の長原式土器からイネ・アワ、讃良郡条里遺跡では凸帯文3期の長原式土器からアワ、弥生前期の遠賀川式土器からイネ・アワ、水走・鬼虎川遺跡では凸帯文3期の長原式土器からキビ・イネ？が報告されている。また、和歌山県内の徳蔵地区遺跡では凸帯文3期の土器からアワ、畿内第Ⅰ様式古～中段階の遠賀川式土器からイネ、立野遺跡では凸帯文3期の土器からイネ・キビ・アワ、畿内第Ⅰ様式古～中段階の遠賀川式土器からイネ・キビが確認されている。

2 長原遺跡の圧痕分析

長原遺跡は大阪平野南部に位置し、1977年～1982年にかけて遺跡東南地区の瓜破台地縁辺で行われた調査（NG8次、NG81-10・82-6次）で、縄文時代晩期末凸帯文期の集落と墓地が見つかり（大阪市文化財協会 1982・1983）、本資料をもとにこの時期の指標として長原式土器が設定された。今回、これらの調査で出土した長原式土器を未報告分含めてほぼ全ての破片 56,528 グラムを観察し、圧痕調査を行った。

圧痕調査では120点のレプリカ試料を採取しSEM観察を行った結果、イネ6点、イネ近似種1点、アワ12点、アワ近似種4点、キビ34点、キビ近似種5点、シソ属3点、ダイズ1点、不明植物種18点のほか、コクゾウムシ2点が確認された。

コクゾウムシを除くそれぞれの植物（近似種を含む）の検出率（n=84）は、イネで8.3%、アワで19.1%、キビで46.5%、シソ属3.6%、ダイズ1.2%、不明種21.4%で、点数的にはキビが最も多く、アワ、

イネ、シソ属、ダイズがこれに続く。したがって、イネおよびキビ・アワのミレット3種の穀物が量的な違いはあれ、栽培されていたことがわかる。また、縄文時代以来の利用植物であるシソ属、豆類であるダイズが確認された点は、縄文-弥生移行期の利用植物の実態を知る上でも重要である。

3 中西遺跡・秋津遺跡・蛇穴遺物散布地の圧痕分析

中西遺跡・秋津遺跡は奈良盆地西南部に位置する遺跡群で、京奈和自動車道建設工事に伴う発掘調査によって複数の遺構面が確認されている。第1遺構面で古墳時代、古代、中世以降の遺構、第2遺構面で弥生時代中期の方形周溝墓や水田遺構、そして厚い砂礫層を挟んで下の第3遺構面で弥生時代前期後半の水田遺構が広く検出され、さらに両遺跡の東北部では間層の下に第4遺構面として、弥生時代前期前半の水田遺構と縄文時代晩期後葉の平地住居や土坑墓、土器埋設遺構などが検出されている（岡田ほか2020、岡田ほか2022）。また、中西遺跡の範囲内では、地表下2mの湧水顕著な砂礫層下面に弥生時代前期の埋没林と4万㎡以上の水田遺構の存在が確認され、秋津遺跡にも連続して広がっていることが明らかとなった（岡田編2017、岡田・絹島編2021、岡田・金原2022）。

ここでは、中西遺跡、秋津遺跡及び近接する蛇穴遺物散布地から出土した縄文時代晩期末凸帯文期から弥生時代前期の土器の圧痕調査の概要を紹介する。

圧痕分析の結果、イネ32点、アワ4点、キビ11点、キビ近似種3点、カラスムギ属1点、ホタルイ1点、材または茎片8点、不明種8点の植物のほか昆虫1点が検出された。

その中でも穀物の時期がある程度絞り込める試料数は、凸帯文2a期でイネ28点、キビ1点、凸帯文3b期でキビ1点、凸帯文3c期でアワ1点、凸帯文3b~3c期でイネ1点、キビ5点、キビ近似種3点、アワ1点、凸帯文3期でアワ1点、大和第Ⅰ様式でイネ4点、アワ1点である。

この内、凸帯文期のそれぞれの植物（近似種を含む）の検出率（n=49）は、イネで59.2%、アワで6.1%、キビで20.4%、ホタルイ2.0%、不明種12.2%で、点数的にはイネが最も多く、キビ、アワがこれに続く。

蛇穴遺物散布地の凸帯文2a期の深鉢形土器、および中西遺跡の凸帯文3c期の深鉢形土器には1個体の土器に多数の穀物種子圧痕が残されている。同様の事例は東日本の縄文時代晩期末の浮線文土器などに見られる現象であるが、西日本に位置する奈良盆地の凸帯文期にも多数穀物圧痕土器が存在していることは非常に興味深い。

4 考察

近畿地方におけるこれまでの検出例に加え、今回行った長原遺跡と中西遺跡・秋津遺跡の圧痕分析から、兵庫県、大阪府、京都府、滋賀県、和歌山県、奈良県を含む広い範囲で、縄文時代晩期後葉の凸帯文期に稲作・ミレット農耕が確実に拡散・伝播していたことが改めて確認された。その初源は凸帯文2期前半に遡り、凸帯文3期にはイネ・アワ・キビの穀物がセットで、本地域における縄文文化の中に普及していた様相が捉えられる。

一方、中西遺跡・秋津遺跡における遺跡変遷を見ると、弥生時代前期前半以降に周辺地域が広大な水田景観に変貌し、集団による水田開発と水稻農耕が短期間に定着化していく現象が認められる。このことは、凸帯文期においてクリ・コナラ・アカガシ亜属・コナラ亜属などの樹木とヨモギ属などの草本からなる疎林空間が、流路の埋積とともに地下水位の上昇や湿潤化し、水田設営地として選択されやすい環境が生まれていた事も一因として考えられるが（岡田・金原2022）、同時に水田開発とその維持・管理に関わる集団的な労働投下を必要とする集団構成や社会的変化が確実に醸成されていた

ことも重要であろう。

したがって、当該地域の穀物農耕の伝播と定着のあり方は、縄文時代晩期後葉に穀物栽培が伝播して縄文社会の中に一定程度浸透・普及していく第1ステージと、弥生時代前期の中頃に大規模な灌漑型水稻農耕システムが整備され農耕への社会的依存度が急激に高まりを見せる第2ステージの2つの段階が存在し、第1から第2ステージへの変化には2百年ほどの時間を要したことが理解される（表1、中山・岡田・赤司 2024）。両者の文化的様相を比較すると、第2ステージへの変化が本格的な農耕社会に向けてより大きな画期であったことが窺えるが、その胎動期ともいえる第1ステージ後半の長原式期の社会的変化にも注目していく必要があろう。

一方で、ミレット栽培を基本とした畑作農耕が第2ステージ以降にどのような形で、あるいはどのような地域で存続するのかは未解明の課題で、今後遺跡周辺の地形的環境や植生環境の違いなどをも視野に入れた地域的研究と、より広域的な比較研究を組み合わせながら明らかにして行く必要がある。

なお、本研究はJSPS 科研費基盤研究（B）「日本列島農耕開始・定着期における農耕文化複合の比較考古学的研究」（代表者：篠原和大；JP20H01348）に伴う研究成果の一部である。

【参考文献】

- 浅岡俊夫 1988「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」『歴史学と考古学（高井悌三郎先生喜寿記念論集）』 pp. 123-184 真陽社
- 泉拓良 1990「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第8集 pp. 55-79 奈良大学文学部文化財学科
- 遠藤英子 2012「西日本の縄文晩期から弥生前期遺跡を対象としたレプリカ法の実践―栽培種子の検出を目指して―」『高梨学術奨励基金年報平成23年度研究成果概要報告』pp. 47-81 高梨学術奨励基金
- 遠藤英子 2013a「栽培植物からみた近江盆地における農耕開始期の様相―滋賀県安土町上出A遺跡・草津市烏丸崎遺跡のレプリカ法調査から―」『日本考古学』35号 pp. 97-112 日本考古学協会
- 遠藤英子・伊藤淳史 2013「比叡山西南麓における栽培穀物出現期の様相―レプリカ法による京都大学構内遺跡出土資料の種実圧痕調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』pp. 181-200
- 大阪市文化財協会 1982『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 大阪市文化財協会 1983『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』
- 岡田憲一（編）2017『中西遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一ほか 2020「中西遺跡第31-2次調査（2019年度）」『奈良県遺跡調査概報 2019年度（第二分冊）』pp. 145-166 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・絹畠歩（編）2021『秋津遺跡Ⅰ（下層編）』奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・金原正明 2022「中西遺跡・秋津遺跡の弥生時代前期水田遺構の変遷とその特質」『考古学論攷』第45冊 pp. 23-38 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一ほか 2022「中西遺跡第33-2次調査（2021年度）」『奈良県遺跡調査概報 2021年度（第二分冊）』pp. 169-194 奈良県立橿原考古学研究所
- 設楽博己編 2019『農耕文化複合 形成の考古学上』pp. 387 雄山閣
- 設楽博己・守屋亮・佐々木由香・百原新・那須浩郎 2019「日本列島における穀物栽培の起源を求めて―レプリカ法による土器圧痕調査結果報告―」『農耕文化複合 形成の考古学上』pp. 191-346 雄山閣
- 中山誠二・岡田憲一・赤司千恵 2024「奈良盆地西南部への穀物農耕の伝播と定着―中津遺跡・秋津遺跡の圧痕分析から―」『帝京大学文化財研究報告第22集』（現在投稿中）
- 濱田竜彦・中沢道彦 2014「西日本―突帯文土器分布圏―における栽培植物の出現」『日韓における穀物農耕の起源』pp. 318-323 山梨県立博物館
- 森岡秀人 1991「近畿地方における稲作農耕の開始と展開」日本考古学協会編『シンポジウム日本における稲作農耕の起源と展開』pp. 39-45 学生社

表1 近畿地方と中西遺跡・秋津遺跡の穀物圧痕の編年的位置

絶対年代 14C BP	時代	土器編年		近畿地方 既存の穀物圧痕検出状況	中西遺跡・秋津遺跡・蛇穴遺物散布地ほか			
		近畿地方	奈良盆地		イネ	アワ	キビ	中西遺跡・秋津遺跡遺構面
2800～2700	縄文 晩期 後葉	凸帯文1期 (滋賀里Ⅳ式)	凸帯文1期					第4-2遺構面 流路・杭列、 土器埋設、火処、 平地建物？
		凸帯文2期 前半 (口酒井期)	凸帯文2a期	口酒井イネ	28		1	
		凸帯文2期 後半 (船橋式)	凸帯文2b期	宮ノ下キビ				
2700～2600		凸帯文3期 (長原式)	凸帯文3a期	長原 イネ・キビ・アワ 北白川追分 イネ・アワ・キビ 上出A イネ・アワ・キビ 讃良郡条里 アワ 水走・鬼虎川 キビ・イネ？ 徳蔵 アワ 立野 イネ・アワ・キビ				
			凸帯文3b期				1	
			凸帯文3c期		1	1	1	
2600～2500	弥生 前期	第Ⅰ様式 古段階						第4-1遺構面 水田遺構
		第Ⅰ様式 中段階	大和第Ⅰ-1様式 大和第Ⅰ-2様式	讃良郡条里 イネ・アワ 徳蔵 イネ 立野 イネ・キビ	4	1		
		第Ⅰ様式 新段階	大和第Ⅱ-1様式					
2500～2400								
2400～2300								

※近畿地方の縄文土器編年については、泉拓良(1990)の西日本広域編年に準拠し、従来の型式名を括弧内に併記した。奈良盆地については、縄文土器は岡田憲一(2011)、弥生土器は藤田三郎・豆谷和之2003に準拠している。